

四 シンガポールで医師となる

M. ガウス医院を開院

そのころ私は、シンガポールに1935年以来移り住んでいた父から電報を受けとった。あまり体調が良くないというのである。私は1939年9月半ばに東京を去って、その月の末にシンガポールに着いた。それまで私は、日本からドイツに行き、国際的に認められているハイデルベルグ大学で、引続き医学の研鑽を積もうと考えていたのだが、ヨーロッパ情勢の悪化のため、その希望は捨てざるをえなかった[1939年9月 第二次世界大戦勃発]。諺に「知識は塩水を飲む如し、飲めば飲むほどのどが乾く」とあるが、大学卒業後私は自分が「からっぽ」だと感じていた。

父も母も幸い健康で、4人の姉妹、3人の兄弟たちも元気だった。6年近く別れていた後での再会は本当に楽しかった。しかしアラブ通りにある父の店、トコ・パダンがほとんど空屋にひどしいことを見出したときのショックは大きかった。もうほとんど商売はあがったりで、それは東京を発つとき想像すらしてなかったことだ。家族の暮らしを支えるために何かしなければならぬ。まずは医師として認可を早速受け、それから適当な場所を探して開業し、できるだけ早く患者をふやすことだ。私はこんな状態のもとですべてが順調にゆくことを神に祈った。

私は早速市役所のビルの中にある医師協議会に出かけていった。そこの担当者はチョーン・グアンという人物だった。私は彼に、開業医として登録したいと述べ、「私は東京の慈恵会医科大学を卒業しました」と言った。彼はまじまじと私を見つめ「日本で学校に行っただけ。奇妙なことだ。マレー人で医学の勉強に日本へ行ったなんて者は一人もいない。ここで勉強した学生はみんな英国へ留学するもんだ。日本で医学を勉強した学生など歴史に例のないことだ。そんなことは信じられない」といい、それから私に何という大学を出たのかときいた。そこで私が「東京の慈恵会医科大学です。今年卒業しました」と繰り返すと、彼は急に怒り出し、「そんな大学は認められていない。そんな名前は聞いたこともない」と言う。私は困って、ケースから卒業証書をとりだして彼の前に掲げた。彼はそれに目もくれずに、「そんなものは香港でも買って来たんだろう」といったきりである。

私は侮辱と衝撃を同時に受けて途方に暮れた。私は彼がなぜ突然あんな侮辱的、屈辱的な言葉を弄したのだろうかと考え、多分彼は当時最高潮に達していた反日感情の持主なのだろうと推測した。私は彼の事務所をなすすべもなく去り、その翌日、日本の総領事豊田〔薫〕氏を訪ねた。豊田氏あての紹介状を私は徳川義親侯からいただいていた。

私が豊田総領事に登録所でのいきさつを語ると、総領事はすぐ秘書に一通の書簡の作成を

命じた。その手紙をもって私は再び登録事務所にチョーン・グアン氏をたずねた。その手紙を彼はイギリス人上司に渡した。その上司はしばらくして部屋から出てくると私に、劇薬の所有権および開業医として登録しようと告げた。私は豊田総領事の親切な書簡に対して心から感謝した。それは1939年10月の半ばのことであった。

登録を受けてのち1週間して私は、たくさんの商店や家作やビルや別荘や土地の持主である不動産の友人に会いにいった。診療所を始める場所がどこかにないかと相談に行ったのだった。私は彼に、1935年、彼が観光旅行で来た東京で会っていた。私は彼を案内して銀座での買物に案内したり、私の良心にさからって茶屋やダンスホールまで連れていった。私は彼の旅行をできるだけ楽しいものにしてやろうと、帝国ホテルに一週間滞在していた彼に一生懸命サービスした。

私は彼が私をおぼえていることを確信し、私の開院場所探しを助けてくれると信じて疑わなかった。そこで彼の事務所について挨拶すると、彼はまるっきり私など知らないふりをする。私がにっこりほほえみかけるのに、彼は渋い顔をしたままである。彼は私に「その後元気かね。いつ帰ってきた、どういう用かね」とすら言わなかった。まったく見知らぬ他人への応待である。ここでも私はショックを受けた。そして私が診療所を開きたいのだが、彼の所有の不動産の中に適当な場所があるかときいた。すると彼は私を見下げるような態度で、「きみは鞆をもってアंक・アマンの路地を歩きまわらんだね。マレー人村には大勢のマレー人がいる。家から家へ訪ねれば患者は見つかるだろうよ」という。彼もが私の学位を侮辱し軽蔑するとは思ってもみなかった。私はその事務所を訪れてから10分後に、不愉快な思いをかみしめながらそこを出た。

私は帰途ひとり泣いた。「私は東京で私の時間と健康を犠牲にしてまで、君の滞在中を楽しんでやろうと努力した。ガイド兼通訳をつとめてやった。夜おそくまで、東京の郊外のダンスホールにすらお伴した。ずいぶん我慢してやったのに、何たる屈辱だ。それなのに僕を見知らぬ他人扱いするなんて。僕は君の東京滞在中を楽しませてやったその本人なんだぞ。」マレー人の諺に「ピーナッツは暑くなると皮を忘れる」というのがある。義理人情を解さぬ輩のことである。

マレー半島パハン州のスルタン閣下は、アルカフ氏一家と親族であった。パハン州の首都クアンタンの国立病院に何かの口があるかもしれない。そう思った私は、フセイン・アルカフ氏に、スルタン閣下への口きを依頼した。アルカフ氏は、スルタンがシンガポールに来られたら私の話をしやろうと言ってくれた。そしてその間、私に1通の手紙を書くように勧めてくれた。しかし何週間たっても返事がこない。そこで私はあらためてもう1通の手紙を送った。私は早く家計を助けたかった。それから10日ほどして返事がきた。しかしそれは、その土地生まれの者しかパハン州で開業することは許されていない、という州政府総務長官からのすげない通告であった。パハン州は医者不足で困っており、私はマレー人だ。それに私は希望をつないでいたのだった。何かほかの理由があるにちがいがなかった。

ベングレン街のセハット医院の責任者であるイブラヒム医師は、私が何ヵ月も就職できないのを見て同情してくれ、私に、階段わきの空いた場所をただで使って診療を始めてもよい、と言ってくれた。私はその申し出を感謝とともに受けた。何もないよりは何かあった方がいい。とにかく少しでも収入があればいい。そうして始めた診療所で、私は1日に数人の患者を診ることができ、出発はまずまずであった。数ヵ月後、私はサウス・ブリッジ街のニッポン診療所から招かれ、1ヵ月200ドルの給料で、朝は9時から12時半まで、午後は2時から5時まで勤務することになった。患者の大部分は性病、梅毒、皮膚病などで、中村医師自身が診療にあたり、私は処方箋の記入だけだった。私は自分自身が診療できる場所を1日も早く見つけたかった。

やがてアラブ街の一角に小さな場所が見つかり、ニッポン診療所をやめた私は、そこに「M. ガウス医院」の看板をかかげた。その場所は診療所と同時に生活の場とするには狭すぎたので、その年の12月にはノース・ブリッジ街に見つけた場所に移った。とうとう自分自身の医院を開くことができたのだ。私は幸福感でいっぱいだった。ミドル街には婦人科の同仁病院があり、渡辺医師の産科医院、安藤医院、石田医院、台湾人チャン氏の医院などがあり、サウス・ブリッジ街には西村〔竹四郎、『在南三十五年』安久社、1936年の著者〕医院、アラブ街とビクトリア街の角には三階建ての順天堂病院があって鈴木博士が診療にあっていた。ノース・ブリッジ街はまだニッポン薬房や江尻〔弘一郎〕とよばれる店もあった。そしてミドル街は日本人のショッピングセンターとして知られていた。

東京滞在中から私は、中国人が多数を占めるシンガポールの反日感情のことを聞かされていた。そして私の到着はその感情が最悪の事態に達していたちょうどその頃だったのである。それは私にとっては大きなジレンマであった。日本留学から帰った私は、民衆の反日感情の犠牲にならぬよう、細心の注意をはらった。診療所の看板には、ただ医師とのみ書いて、東京という字は出さなかった。そんなことを書けば何か妨害されるおそれがあった。マレー人ですら、私は日本で勉強してきたことを言わないようにつとめた。したがって、新聞記者が私にインタビューに来たとき、私はびくびくしていた。その『ウトサン・ムラユ』紙の記者は私に、出生地、学歴、なぜ日本へ行ったか、どこの大学で何を専門としたか、など詳細にたずねた。その翌日の同紙には、センセーショナルなインタビュー記事がでかど出され、しかも賞賛をこめた好意的なものであった。「東京の慈恵会医科大学で医師の学位をとった最初のマレー人医師が、ノース・ブリッジ街で開業した。シンガポールの歴史始まって以来のことである。われわれマレー人は、彼を誇りとし、ガウス医師のご成功を祈る」とその記事は結んであった。

私に対する世論はどうなのだろう。私には分からなかった。いずれにせよ私は、自分の足どりが注意深く見つめられているという“臭い”を感じた。私が日本から持ち帰った10ヵ条の土産は、私と家族の安全のために、鉄の金庫に入れられ、鍵をかけて奥深くしまいこまれた。私は固く口をとじていた。10ヵ条の土産とは以下のものである。

東京慈恵会医科大学医学士の称号

世界平和のための文化的日本

アジア人のアジア、アジアは一つ

オランダ帝国、イギリス帝国ならびに両者が一つになった帝国との対決

ハッタ博士およびストモ博士と会ったこと

心と心の結びつきは田舎から始まる

『ビンタン・ティモール』と『神戸新聞』（に語った）の祈りの成就

「母の祈り」アッラーにかなえられる

「空手で帰るな」との父の祈りも

花は咲かないことはない！

政治に関与は一切なし。東京という字を抜かした歴史的、劇的な看板のおかげで、私は無事だった。その看板は45年たった現在も、私の生命を救った歴史的記念物としてそのまま大切にされている。

シンガポールについてから私は、日本人商店がコールタールで真黒く塗られた話や放火された話などを耳にしたし、ビーチ・ロード・マーケットで日本人と中国人漁夫との間で争いがあった話などをきいた。日本商品はボイコットされ、日本商品を買った者は人力車に拒否された。買い手が耳を切り落とされたなどという話もあった。

1941年12月8日

家の表に面した一室で眠っていた私は、午前3時45分頃、物凄い音で目がさめた。私はまさかそれが戦争の始まりとは夢にも思わなかった。その2ヵ月ほど前から英軍は演習を続けていたので、私はその物音も演習のためかと思った。しかし10分間ほどたつとまたすごい爆音。私は窓側に行き空を見上げた。どこにも煙はあがっておらず、診療所の前には、ビーチ・ロード市場にむかって車を引いていく中国人の物売りが歩いているだけだった。町は朝の日に明るく輝いてみえた。空のタクシーが走っていった。一人の男が通りを横切っていった。早朝4時半の町はまだ静まりかえって平和だった。

私はまたベッドに入りうつらうつらとしながら、ときどき聞こえる砲声は演習にちがいないと考えていた。朝9時、朝刊をひろげると『ストレーツ・タイムズ』のトップに、「真珠湾攻撃され、日本宣戦を布告」とあるではないか。私はとっさに、東京で見たさまざまのものごとを思いだした。「どうしてそんなことが」と私は思った。日中戦争はなんらの解決を見ないまま延々と続き、日本も中国も相当の痛手をこうむっていた。満洲国の開発も必要であり、莫大な資本が必要であった。日本は自国に天然資源がなく、ほとんどのものを海外から輸入していた。日本国民の意気は高く、すべてを国家の名誉のために捧げる用意があるといわれてはいたが…。私は大きく吐息をつき「信じられない」と呟いた。

砲声はますます激しくなりつつあった。人びとは食物を求めて右往左往し、町はパニック

状態におちいった。私が階段をおりかけたとき、診療所から半キロほどのジャラン・クブールに爆弾が落ちた。私は最後の2段を踏みはずして尻餅をついてしまった。耳をろうするばかりの轟音の中に診療所は揺れ動いた。私たちはどこかに引越すことを決めた。どこか遠い所に安全な場所を探さなければ。家族は分散したほうがいい。そこで私はブキティマのコロネーション通りの寺院の傍らにある私の運転手クスマンの小さな家に泊めてもらうことにした。しかし道は車が走れる状態ではない。とにかくココ椰子やゴムの木の下に避難した。家族はクンバンガン通りの友人モハマッド・アミン船長の家に寄せてもらった。

1942年2月半ばには、日本軍はジョホール州とシンガポールの境をなす道路を攻略しはじめた。ロビンソン街にある捜査課のマレー人職員がやってきて、私に出頭を命じた。それは朝9時半ごろだった。彼は私の患者の一人でリジュアンという男だった。「先生、職務上仕方ありませんので…」と彼は私に謝った。「いいですよ」と私は答えた。出頭するとマレー班の係官はラヒム氏で、彼もまた私の患者だった。彼は悲しげな面持で私を英国人上司のところへ連れて行き、私は彼からいろいろな質問をされたが、記憶に残るかぎりでは次のようなものであった。

Q. 「日本にいたそうだね。」

A. 「はい、いました。」

Q. 「日本で勉強したのか。」

A. 「はい、そうです。」

Q. 「何年間日本に滞在したのか。」

A. 「6年間です。」

Q. 「こちらへ帰ったのはいつかね。」

A. 「2年前です。」

Q. 「どこで診療をしているのか。」

A. 「ノース・ブリッジ街です。」

Q. 「日本人の友人は多いかね。」

A. 「はい。」

Q. 「日本人は好きかね。」

A. 「いい人たちです。」

するとこの英国人係官はいきなりラヒム氏に、私を6号の独房に入れろと命じた。私を連行したのはマレー人の警官であった。罪状宣告すらなかった。

6年間の私の「アルバム」からの証拠は、大亜細亜大会におけるスピーチ、そして頭山満翁と一緒に写真(R. スジョノ先生、ユスフ・ハッサン氏と私)である。この二つの証拠によって私は、1946年の4月はじめにも、アウトラム街刑務所の32号独房に再び軟禁された。私に対して、オランダ帝国主義がイギリス帝国主義に協力していることは明らかであった。

誰も入っていない独房—6つあった—への通路は3人の警官しかいなかった。私のかくれ

家からロビンソン街までの道にも誰もいなかった。ただグルカ兵の乗ったジープ何台かに出会った。

私の入れられた第6号独房は奥行6メートル、幅3メートルのもので、窓はなく、1日中太陽がさしこまぬ鉄格子の小部屋であった。床には直径5、6センチの丸太に4枚の板が釘で打ちつけてあり、それがベッドであった。私は着のみ着のままでそこに横になった。敷くものも掛けものもなく、白い長袖シャツ、下着と空色の長ズボンだけが、荒けずりの板から私の身体を保護するものであった。朝には2、3切れのパンと砂糖入りの茶が与えられた。昼食は米飯に魚（ときどきは肉）と野菜入りのカレーで、それから朝までは何もなかった。マレーの諺をかりれば、「夜になると胃の中で、中のものが互いに相争う」からである。

私は眠れなかった。耳もとでは蚊がブンブンいうし、手や足は飢えたノミなどに食われ放題だった。それにサイレンの音、飛行機の音、爆撃音、機関銃掃射の音、ジープの走る音、捜索中の兵士の靴音などがひびき、爆音とともに自分のいる建物が揺れ動くのが感じられた。それは苦難の体験であった。アッラーの神への祈りに慰めを見出し、勇気をださなければ、と私は思った。私は慈恵会医科大学での勉強の日々や日本文化連盟のこと、大亜細亜大会での興奮や、インド代表のイギリス帝国打倒の叫び、アジア人のアジア—これはきわめて人気のあるスローガンだった—、日本精神、東洋から西洋を駆逐せよ、「東は東、西は西」、など私がいままで聞いたスピーチのきれぎれの言葉を想像していた。「インドネシアは独立せねばならない」と私は声を大にして述べたものだった。「統一された、繁栄し幸せな新しいアジアが生まれなければならない」という決議もあった。

また私は、祖国インドネシアのために私が行った行動や東京での活動をも思い出していた。私は10日間この独房に入れられた。オランダの支配下の臣民である私を、イギリスは拘留する権利はないはずである。1939年9月から1942年1月まで、私がシンガポールに住んだ3年4ヵ月のあいだ、私はインドネシアの同胞に向かって、イギリス帝国に対して反乱をおこせなど扇動したことはまったくなかった。実際のところ私は中国人のもつ反日感情のために軟禁されたのだった。もし私が危険人物と思われていたのなら、シンガポールに入国する許可を与えるはずがない。英国官憲はその場ですぐ私をオランダ官憲に引き渡せばよかったのだ。東京での私に関する情報は、オランダ側がイギリス人に与えたにちがいないのだから。真の証拠は、押収されてイギリス官憲の机上にある私の6年間のアルバムなのだ。私は、彼らの申し立てを否認するような卑怯者ではない。私がしたスピーチも、頭山満翁と一緒に写した写真も、イギリス帝国とは何のかかわりなかった。「なぜ犯罪者なのか」と私は自問した。

アッラーは真に偉大な神である。それはある朝のこと、私が格子越しに外を見ていると、ラヒム氏が自分の執務室に行くために通りかかり、私を認めて、驚いた顔つきでしばらくしげしげと見つめていた。そしてそれから15分後に彼は私のところにとって返し、即座に私は釈放された。一人の巡査の監視する独房6号唯一の囚人は自由の身になったのである。も

しラヒム氏が私に気がつかなかったら、そしてラヒム氏を含む警官たちを含めてイギリス人上司が捜査課を見捨てて身の安全をはかってどこかへ移ったとすれば、逃げ出すこともできない私はいったいどうなっていたらう。

両親をはじめ4人の姉妹と2人の兄弟との再会は、涙のうちに行われた。私たち皆が無事だったことは、何よりもありがたいことだった。私はまるで骨と皮ばかりのようになっていた。まず体力を、健康をとり戻さねばならない。このイギリスの植民地で、私はなんと高価な犠牲を無駄に強いられたことであつたらう。

1942年2月16日午前10時、日の没することのなかった大英帝国は降伏した、とラジオの放送があつた。私がオランダおよびイギリス帝国を相手に対決した証拠は明らかである。それは私が日本から持ち帰った土産の第10番目の項目であつた。